高品質良食味水稻新品種「きぬむすめ」の県奨励品種（認定品種）*指定

兵庫県中南部の水稲良食味品種は、極早生の「キヌヒカリ」、中生の「ヒノヒカリ」があるが、共同乾燥施設の稼働期間の分散化や、一層の品質向上等のため、早生の良質・良食味品種が求められている。そこで、「日本晴」と同じ早生熟期に属する「きぬむすめ」を本県の認定品種に指定し、県中南部の良質・良食味米の生産振興及び施設利用の効率化を図ることとした。

1 兵庫県認定品種の指定理由

本県水稲の作付けは、良食味品種である極早生の「キヌヒカリ」「コシヒカリ」、中生の「ヒノヒカリ」に8割以上が集中している。その中で、「キヌヒカリ」は、県中南部を中心に1万1千ha以上（約29%）栽培されているが、登熟期の夏季高温で乳白等の白未熟粒が発生しやすく、2009年の1等米比率が45%程度と低く、品質の低下が問題となっている。

そこで、「キヌヒカリ」と同等あるいはそれ以上の良食味で高温耐性のある品種を検討したところ、「キヌヒカリ」と同じ熟期ではないものの、早生の「きぬむすめ」が作期分散の面からみても有望と判断された。そこで、本品種を生産団体や実需者と共同して2003年から当センター場内及び現地において検討したところ、栽培しやすく、良質・良食味米としての評価も高く、また、近畿・中国・四国地域でも生産拡大が進んでいることから、「きぬむすめ」を県の認定品種として指定し、普及拡大を図ることとなった。

2 品種特性

母が「キヌヒカリ」、父が「祭り晴」で、名前のおり「キヌヒカリ」の“娘”である。出穂期は「キヌヒカリ」と「ヒノヒカリ」の間で、耐倒伏性は中、収量性は比較的高い。いもち病や紋枯病の抵抗性は「キヌヒカリ」同様強くない中である。玄米の外観品質は良好で、炊飯白米の外観もつやがあって白く、「コシヒカリ」より優れる。食味は、「コシヒカリ」より淡白であるが、粘りがあり、本県中南部では「キヌヒカリ」以上と良好である。穂発芽性は「中」でやや穂発芽しやすいが、現地試験中に

問題になったことはなく、また、収量性や品質などの形質が安定し、栽培適地が広い。

3 栽培上の注意点

穂肥の施用により穂が大きくなりやすく、過剰な初数（35,000粒/m²以上）は品質低下につながるため、多肥栽培は避け、穂肥は出穂前15日頃に施用する。また、基肥に緩効性肥料を利用することにより、比較的均一な生産が可能である（80～140日タイプの肥料（14-14-14）で、10a当たり製品40～50kg）。

根が弱く、早期落水すると登熟歩合が低下しやすいので、収穫1週間前までは間断かん水を行う。また、いもち病には強くないので「キヌヒカリ」並みの防除を行うとともに、穂発芽防止のため適期刈り取りに努める。

成熟期は田植日が同じ「キヌヒカリ」より2週間程度遅く、「ヒノヒカリ」より5日程度早い。このため、「ヒノヒカリ」より1週間早く収穫するためには、「きぬむすめ」の播種日を「ヒノヒカリ」より1週間早くする必要がある。9月末までに収穫するためには、5月末～6月初旬までに稚苗を移植する。

今後の方針

2010年度は県南部（北淡路地区を含む）地域に重点地区を設け、80ha程度の作付けを行い、順次地域・面積を拡大する計画である。

三崎 恒敏、岩井 正志（農産園芸部）
（問い合わせ先 電話：0790 - 47 - 2410）

県が積極的に普及奨励する奨励品種に準ずる品種。奨励品種に準じた収量性及び栽培性を有するが、適応地域の範囲、市場性等で未確定の要素があるため暫定的に普及するもの。